

ローマ人への手紙 第12章 15節

「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」

冬季オリンピックが終わり、その間さまざまなドラマが生まれた。ときには歓喜に湧く会場が映し出され、ときには涙する競技者が映る。どの場面も観客にとってはこころ動かされる場面となる。ある者は共感し、まるで自分が勝者かのように喜び踊る。ある者は涙する競技者に同情し、あたかも自分がそこに居るかのように同調する。喜びも涙も全人類に共通する日常体験である。この体験をひとりですることはないのである。

この体験をひとりで担うことはないのである。ひとりだけの体験では、もったいなく、また担いきれないものもある。喜びあり、涙が絶えることなく日常に起こる。全人類の歩みに起こっている。この単純、素朴な人の体験を通してすべての者が生きることへの連帯が可能である。

一人が喜ぶとき、世界の喜べる者たちとの連帯が生まれる。誰もが受け入れられる体験である。一人が涙するとき、世界の痛む者たちの連帯が生まれる可能性がある。痛み、悲しみ、涙する辛さは万人が知る体験である。この喜びと涙の体験を通して生まれる連帯の間に敵意をさしはさまないならば、いっしょに分かち合い、担う世界が生まれるはずだ。

2022年3月1日